二〇二〇年一一月二〇日

ボジョレヌーボーひと口飲めばパリ気分　たか子
先生は米寿勤労感謝の日　凡士
回廊をみな白足袋の僧侶かな　素秀
紅葉燃ゆ千歳の古刹埋め尽くし　菜々
塾帰り最後は走る枯野道　凡士

二〇二〇年一一月一九日

身の内に命あふるる冬木の芽　明日香
無住寺の今盛りなる石蕗の花　こすもす
おちょぼ口して侘助の咲き初むる　智恵子
赤信号待つ間の木の葉時雨かな　明日香

二〇二〇年一一月一八日

コロナ禍に幕間の咳もはばかりぬ　豊実
下校の児缶を蹴りつつ路地小春　たか子
コロナ禍の早く癒えよと流星雨　む べ
稜線をシルエットとす冬夕焼　ぽんこ
爽やかや小紋きりりと案内嬢　菜々
パレットに全色溶きて紅葉描く　明日香

二〇二〇年一一月一七日

玉砂利に草履噛まるる七五三　宏虎
又ひとり増えて小春の縄電車　菜々
大輪の菊箍ゆるむ出窓かな　みきお
冬に入る砂利音乾く御陵道　はく子
降りやまぬ木の葉両手で受ける児ら　こすもす

二〇二〇年一一月一六日

花嫁の菓子ほろ甘き小春の日　素秀
磨崖仏今し紅葉の額の中　智恵子
亡き夫の書架整理して秋惜しむ　みづき
紅葉寺苔に寝転ぶ稚児地蔵　智恵子
をみならはお喋りばかり紅葉見ず　もとこ
丹波路の朝立つ霧に僧の影　凡士

二〇二〇年一一月一五日

水鳥の助走の長き水しぶき　ぽんこ
菰巻きの荒縄匂ふ松並木　みきお
冬耕の人のあと付く鳥かな　たか子
廃線の錆浮く鉄路草紅葉　みきお
振袖に運動靴や七五三　ぽんこ

二〇二〇年一一月一四日

肩たたきの小さきげんこつ冬温し　なつき
鐘突けば余韻や法の紅葉山　たか子
冬温し関守あとの露地に猫　たかを

毎日句会みのる選・二〇二〇年一一月二二日